子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈2〉
―平成17年度実施プログラム―

若杉　雅夫　瀬地山葉矢　長谷部和子　松尾　良克　三羽佐和子
篠田　美里　伊藤　功子　杉山喜美恵　窪田千恵子〔※〕

はじめに

平成16年度後期より，「あそびの森」を開始し，好評なうちに終わった。

「あそびの森」が好評であった背景は，第一に平成16年度の研究成果にあげられているように「親子で共にさまざまな遊びを体験する機会と場を提供し（中略），子どもの主体性，考える力を培い，養うこと」を共通テーマに取り組んだことが，保護者に受け入れられたこと（参加者は延べにして904名であった）、第二に子どもたちが友だちとのびのびと遊べる場を保護者が求めているという現状に合致したことがあると思う。また，学生にとっても実習ではなかなか接することができない，親子の触れ合いの場や，親の話を聞く場があったことは収穫である。

これらのことを踏まえ，また，平成16年度を始めるにあたって願った，地域との共生につながるとともに，次世代支援の中核をなしている「子育て支援」と，保育者養成校としての「学生育成」につながるとして，今年度も「あそびの森」を行うこととした。

今年度は，平成16年度に得た，さまざまなことがらを，一つ一つ確かめながら，より確かなものにしていくことを望むと共に，学生が昨年以上に，自分たちの力を出して行えるようにと，どの教員も意義をはっきりさせたいと思い，準備段階からの学生の積極的な参加を求めた。また，参加希望の親子が昨年の倍以上と多かったので，急遽，できるものについては，午前午後の2回行うこととし，参加希望回数を増やすように努力をした。

また，昨年度の願いであった，臨床心理士を中心とした子育て懇話会は2回行った。

以下，平成17年度に実施した11プログラムについて，活動報告を記述する。

活動報告

2005年度「あそびの森」プログラム

〈前期プログラム〉

No.①　5月28日
「新聞で遊ぶ」　若杉　雅夫

No.②　6月25日
「子育てに関する懇話会」　瀬地山葉矢
「お話しの世界で遊ぼう」　杉山喜美恵

No.③　7月9日
「英語で遊ぼうピンポンパン・世界の遊び」
長谷部和子

No.④　8月27日
「親子で作るペーパークラフト」　松尾　良克

No.⑤　9月17日
「子育てに関する懇話会」　瀬地山葉矢
「小麦粉粘土遊び」　三羽佐和子

〈後期プログラム〉

No.⑥　10月22日
「うたっておどってレッツゴー・みーちゃんのおはなし」
篠田美里・三羽佐和子

No.⑦　10月29日
「できるかな？はいるかな？あたるかな？」
伊藤　功子

No.⑧　12月10日
「クリスマス会」　杉山喜美恵

No.⑨　1月28日
「つくって鳴らそう」　窪田千恵子

No.⑩　2月18日
「粘土遊びのクッキー作り」　若杉　雅夫

No.⑪　2月10日
「幼稚園交流会」　若杉・三羽・篠田

※平成18年度東海女子短期大学非常勤務講師

プログラムNo.①

活動名　「新聞紙であそぶ」

実施日・会　場

平成17年5月28日（土）

10：00 am ～12：00 pm

保育実習室

ねらい

・思いっきり気持ちを発散する。
・腕・指先などの身体機能を高める。
・自由な活動で、親と子の気持ちを和らげ、ともに遊ぶ楽しさを体感する。
・想像力を刺激し、感受性を高める。

担当者　若杉雅夫

参加人数

75名　参加家族27組

保護者36名　子ども39名

手伝った人数および担当者

教員：5名　学生：25名

内　容

今年も「あそびの森」は、新聞破りから始まりました。新聞破りは、遊びの中で思いっきり気持ちを解放することができます。また、その過程で周りの人やその場に慣れ親しむこともできます。さらに、破ったりちぎったり引っぱったりすることで、腕・指先などの身体機能をも高めます。また、今回は破って偶然にできた新聞紙の切れ端からの連想遊びも新しく加え、機能的快楽遊びから想像的遊戯へと遊びの内容を広げました。

活動の導入は、先ず学生の手遊びで子供の視線を惹きつけてから遊びの内容について実演を交えて説明した。

新聞紙は一人につき朝刊一部を配布し、活動が活発かつ円滑に展開するように状況に応じて補充した。新聞破りの活動に入った参加者は日常のストレスを思いっきり発散するかの如く、保護者も子供も自由闊達に遊びを楽しんだ。（図-1）

破って気持ちを発散させた後は、後片付けも兼ねて部屋一杯に散らばった新聞紙をスーパーのポリ袋に詰め、ドッヂボールやサッカーを楽しんだ。遊びの締めくくりとして、破った形から想像力を働かせ、見たて遊びをした。ロケットや花や動物と、豊かな子供たちの想像力に驚かされるとともに、保護者も子供と共に一生懸命頭を捻って真剣に新聞紙の切れ端を見つめる姿に感動した。

（図-2）

総括・反省および考察

今回は、9人のお父さんがお子さんと一緒に遊びを楽しまれた。昨年よりお父さんの参加が増えたことは、父親の子育て理解・参加という点でとても良いことだと考える。また、学生の支援も言葉がけなど積極的に親子に関わろうとする姿勢が随所に見受けられ、遊びの支援に関する授業内容の工夫の成果が顕在化しつつあると感じた。今後この実践例を元に、活動過程での親と子の関係並びに遊びの支援について学生と共に反省・考察し、親と子の理解を深め、適切な援助のあり方を探求し、更に支援能力を高める必要を感じた。

図-1 新聞紙を破って気持ちを発散

図-2　破った切れ端から連想遊び

プログラム№②

実 施 日

平成17年6月25日（土）

10：00 am ～12：00 am

活 動 名　親：子育てに関する懇話会、

子：おねえさんとあそぼう

ね ら い

親：日頃の子育てを話題にしながら親同士の交流をはかる。またその語り合いを通じて、あらためて自分自身、子ども、家族について振り返る時間をもつ。

子：親と分離した時間を楽しくすごす

＜主催者側＞

親と離れた子どもたち、特に低年齢の子どもたちが不安になることのないよう、また、親が安心して懇話会に参加できるよう配慮する。

担 当 者

親：　瀬地山　葉矢

臨床心理士　4名（うち教員1名を含む）

子：　杉山　喜美恵

参加人数

59名　　参加家族22組

（保護者：22名／子ども：35名）

手伝った人数

学生：24名（瀬地山ゼミおよび杉山ゼミ）

内　　容　親：懇話会　子ども：年齢別活動

総　　括

1．子育てに関する懇話会

子育てにストレスを感じたり、子どもとの関わり合いに不安や困難を覚える親は少なくないと思われる。親を対象としたサポートの場は、各地域や関係機関において徐々に増えつつあるが、まだまだ行き届いていないのが現状である。そこで試みに、あそびの森においても、子育てに関する懇話会を実施した。育児にまつわる日常的な話題はもちろん、専門家によるサポートが必要なケースにも対応できるよう、懇話のファシリテーターとして、各グループに1～2名ずつ臨床心理士が参加した。

保護者を対象とした懇話会には22名が参加し、子どもの年齢により、【0・1・2歳児】、【3・4歳児】、【5・6歳児】の3つのグループに分かれて、「日頃の育児で感じること・困ったこと」をテーマに、およそ1時間話し合いを行った。【0・1・2歳児】グループでは、「一日中家にいるとストレスが溜まり、どうしたらいいかわからない」、「子どもをかわいいと思えない時がある」などの会話が交わされた。母親自身の精神的不調を訴えるケースもあり、これについては、懇話会終了後に専門の相談機関を紹介するなど個別に対応を行っている。

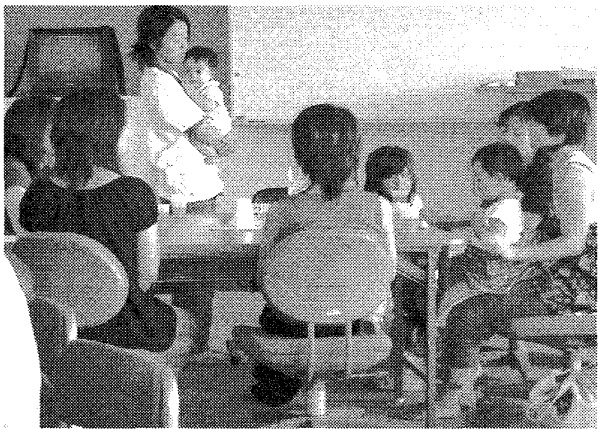
【3・4歳児】グループでは、ある参加者から、「一人っ子できょうだいに揉まれることが少ないからか、子どもの食欲があまりない」という話題が出ると、他の参加者より、「料理はちゃんと工夫しているのにね」、「必要なだけきちんと食べているのではないか」など、食事に関するそれぞれの体験談や解決策が提示され、話し合いが進んでいった。

【5・6歳児】グループでは、「自由保育を行っている園に通っているが、小学校の授業中、席についていることが難しいと聞き心配している」、「保育園・幼稚園によっては、ひらがなや計算の教育を行っているところもあり、小学校入学時に学力に差がついてしまうのではないか」など、就学に向けての不安も話題に上がっていた。

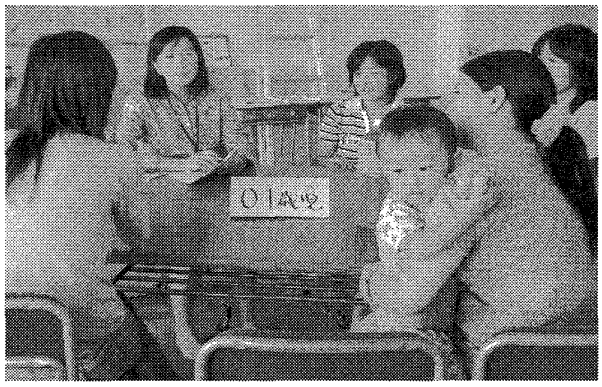
この子育てに関する懇話会は、近所づきあいや子どもが通う園の母親仲間、あるいは地域の子育て支援施設など、参加者が日常的に関わり合いのある空間や人間関係からは距離を置いた場であり、その点で、比較的周囲に気兼ねなく安心して子育てについて語り合える場と言えるのではないだろうか。また各グループに参加した臨床心理士は、必ずしも「答え」に導いていくやりとりをめざすのではなく、語り合うことで参加者が抱える課題に自ら気づき、あるいは同じ悩みを持つ仲間の存在を知り、そこから参加者自身が力を得ていくことをめざしたファシリテートを行っている。懇話会終了後、参加者に実施したアンケートによると、「同じような悩みをもっている人がいることがわかってよかった。どうしたらい

いのか解決策は出ませんが、話すことで少し救われる気になります」、「子どもと離れてゆっくり話しができてよかった」、「他の幼稚園のことやきょうだいのことが聞けて良かった。また参加したいです」などの意見をいただいた。その一方で、「時間が思ったより短かった」、「盛り上がった頃に時間が終わってしまった」、「短時間で結論的なことは出ないが、こういうグループを継続して慣れてくると、もっとまとまった意見が言えるだろうなと思った」など、時間の短さや思うように話しができなかったことを指摘する声もあった。

実施時間については、子どもの側の事情、とりわけ低年齢児にとって親との長時間の分離が困難であることから、むしろ短時間であっても参加者にとって手応えのある懇話会のあり方を検討していく必要がある。そのためには、臨床心理士によるファシリテートの方法にも一層の工夫が求められよう。テーマに関しては、今回の懇話会はあそびの森での初めての試みであったことから、参加者の育児に対する思いを探る目的もあり、「日頃の育児で感じること・困ったこと」というやや漠然とした間口の広いテーマを設定している。限られた実施時間の中では、さらに具体的なテーマを設定して進めていくことも一つの方法であろう。



なお9月17日に実施されたプログラムNo.5においても、6月と同様の形式およびテーマで、子育てに関する懇話会を行った。参加者は22名であった。【4・5・6歳児】グループでは、「きょうだいげんかの止め方」、「ゲームやテレビの制限の仕方」、【2・3歳児】グループでは、「子どもを叱ってしまうことへの罪悪感」、「夫の育児への協力について」など、子の年齢に応じた話題も多く出された。参加者たちはそれぞれの思いを語りながら、他の参加者の声にも耳を傾けていた。懇話会終了後には、「最近イライラしていたが、話を聞いてもらえて落ち着いた」、「(悩みは)自分だけじゃないんだと思うと気持が楽になった」との感想を得ている。



2．子どもの年齢別活動

3歳以上児に関しては、親との分離不安もほとんど見られず、年齢別活動を楽しんでいた。しかし、2歳児に関しては、親と離れたことに対する不安を訴える子どもも多く、ひとつの活動をみんなでおこなうことはできなかった。このことは、2歳児の発達を考えたとき、当然予測できることであり、事前に指導もしていたが、話として聞いていても実際に直面すると、とまどいを感じているように思われた学生もいた。0.1歳児に関しては、ほとんど懇話会会場とあそびの森会場とをいったりきたり、あるいは親のそばで子どもを抱いているといった状態であった。

これらの状況をふまえ、次回は3歳以上に関しては、他のグループの制作もできるように準備をしていく必要を感じた。

また、2歳以下の子どもに関しては、0.1歳児は懇話会会場からの距離を考えてむしろ託児室（おねむさんのおへや）を利用した方がよいと思われる。また、懇話会会場でも子どもが遊べるよう、学生を配置しておくこと、なるべく一人の子どもに一人の学生がつけるよう、担当を決めておくことが必要だと思われる。

プログラムNo③

活動名

「英語で遊ぼう、ピン・ポン・パン」

実施日

平成17年7月9日（土）

10：00 am ～12：00 pm

ねらい

＜親　子＞

親子でゲームや歌を通して英語に慣れ親しむことで、日本語に無い発音や異文化にも違和感を持たない子どもに育つ

＜学生＞

最近はカリキュラムの中に英語を取り入れている園は多く、歌や遊びの中で子どもがどのように英語に親しんでいくかを見る

担当者

長谷部ゼミ（指導教員：長谷部和子）

参加人数

63名　参加家族24組

（保護者25名・子ども38名、）

手伝った人数および担当者

教員：4名　　学生：31名

担当内訳

教員：学生補助

学生：受付、司会進行、子どもの安全管理、託児（おねむさんのお部屋）

内　容

9：20	あそびの森に集合・説明・注意事項・各自の仕事内容の確認
9：40	学生・教員　所定の持ち場につく
10：20	開始の挨拶（長谷部）
10：30	①　ハローの歌
	②　ダッデイフィンガー
	③　セブン・ステップス
	④　ワンリトルフィンガー
	⑤　大きな栗の木の下で
	⑥　英語のカルタ取り
	⑦　英語の手遊び(Little Piggies)
	⑧　グッドバイ

考察および反省

①～⑧までの⑥、⑦を除いて英語の歌である。子どもは英語であろうと日本語であろうと耳からの感覚で覚えて歌ってくれる。しかし、親は抵抗感のある方もいて、事前に大人も歌うのかという質問があった。親子で気楽に英語に親しむという願いもこめて、英語の学習の観点から見ると抵抗感のある方法ではあるが、最初それぞれの親子に当日歌われる英語の歌とその振り仮名を打ったパンフレットを渡した。そのため全員で歌うときに親にもそれほどの違和感は無く、気楽に大声で歌っていた。特に「大きな栗の木の下で」はメロデイーに親しみがあり、一段と声が大きくなった。大人は英語の音を認識するまでに時間がかかって声が出せにくいとか、メロデイーを聞いたことがないという理由で大きな声で歌うことに躊躇されることがあるが、この方法だと違和感無く歌えるようである。

英語のカルタ取りは、それぞれ26文字のアルファベット文字のカルタを2倍にすることで日本語のカルタ取り（51文字）とほぼ同数になり、同じ感覚で楽しむことができる。始める前に全てのカードに出てくる単語の学習を行い、あらかじめ英単語の知識を得ておく。この場合に大人はある程度の知識があるが、子どもは一度で覚えることは難しいので、英語の後に日本語の説明を加えることでカルタが見つけられる。例えば、E is for 'elephant'.「ゾウさん、ゾウさん」、E is for 'elephant'.と日本語を足すことでElephantの単語を覚えて欲しいのである。

A 4サイズまで拡大したカルタを26文字×4枚用意し、床に並べ連呼と共に主として子どもと共に取って貰うことを目的とした。これは子どもよりも親のほうが熱心になる姿が見受けられた。

親の英語に対する興味は強く、幼少時から慣れれば話せる英語を覚えるのではないかという期待が大きい。幼少時の語学学習は楽しんで慣れることが重要で、それを親が上手く援助できることが理想であり、強く覚えさせようとする姿勢は全く逆効果である。親と一緒にゲームや歌で英語に慣れ、遊ぶという時間が持てたことで、その一端を担えたのではないかと考える。

また、学生は科目「英語」に囚われないで遊

んでいる親子の姿を見て、自信のない発音でも元気よく活発に、親子の中に入っていくことができた。

プログラムNo.④

活 動 名　「親子で作るペーパークラフト」

実 施 日

平成17年8月27日

10：00 am ～12：00 pm

ね ら い　親と子どもが一緒になって一つの物を作る事により、親子のコミュニケーションをはかるとともにできあがった作品を使い遊び楽しむ。

担 当 者　松尾良克

参加人数

参加家族　18組　50名

保 護 者　18名・子ども32名

実施スタッフ

教員4名・学生35名

(幼教29名・食栄 6名)

内　容

事前に、インターネットサイト上で公開されている無料の、ペーパークラフト用紙を印刷し、参加家族ごとに、子どもの人数に応じた数の作成用紙を袋詰めして用意しておき、受付時に参加者に渡した。

活動開始時に、学生による手遊びで子どもの気持ちを引きつけた後、ペーパークラフトの作り方、遊び方を説明し作成作業に入った。

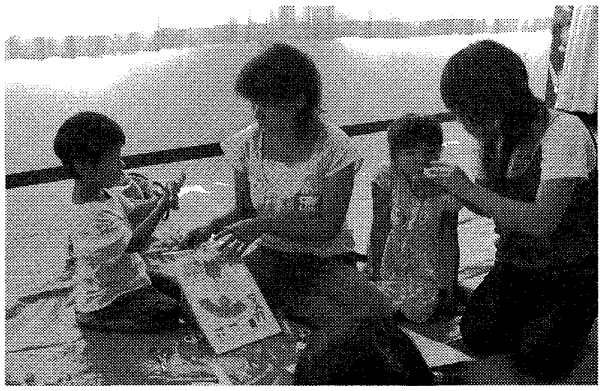
作成には、切る・折る・貼り付けるの作業があり、親も子も共に、夢中で作成作業に没頭していた。二人以上の子どもと参加された家族には、学生がそれぞれの子どもに付き、一緒になってペーパークラフトを作り、参加家族のサポートを行った。

参加者の中には子どもより夢中となってペーパークラフトを作成している保護者の方もおられた。また、子どもも自分で切ったり、貼ったりして色々な作品を作れることに喜びを感じていたようだった。

今回の作品は、グライダー・紙（竹）とんぼ・指人形・吹きごま・モリゾー・キッコロ等を用意した。17年度は愛知県で「愛・地球博」行われており、博覧会のキャラクターであるモリゾーとキッコロのペーパークラフトを見つけ用意したところ、話題の人気キャラクターのため、子どもも喜んで必死に作っていた。

色々な作品を作成後、それぞれ親子であるいは子どもたち同士で飛ばしたり、回したりして楽しんでいた。

作成風景1



作成風景2

総括・反省及び考察

今回は予備の印刷物も充分用意をし、前回使用しなかった印刷物も自由に使用して頂けるように受付に準備しておいた。子どもの中には色々な物を作ってみようとする意欲のある子も多く、ほとんどの印刷物がなくなった。

作成する印刷物を選択するにあたり、過去に参加された家族もおられ、すべてが前回と同じ作品というわけにも行かず、簡単に出来る物、作った後で楽しめる物等を考慮すると、選択に難しさがあった。

また、参加している子どもの年齢層、男女により興味を引く作品、話題性のある作品を用意する必要があるように感じられた。

プログラム№⑤

活 動 名　「小麦粉粘土遊び」および
「子育てに関する懇話会」

実 施 日

平成17年9月17日

10：00ａｍ～12：00pm

ね ら い

・小麦粉のさらさらした感触を楽しむ
・小麦粉に水を加えて粘土になる様子や色の変化に不思議さやおもしろさを感ずる
・粘土のべとべと，すべすべ感を身体で感じて楽しむ
・丸めたり伸ばしたりちぎったりしながら，好きな物を作ったり壊したりして楽しむ
・子どもについて，親としての様々な思いを話したり，他の人の話を聞いたりして，子育てのヒントを得る

担 当 者　三羽佐和子・瀬地山葉矢

参加人数　５４名　参加家族２０組
（保護者22名／子ども32名）

手伝った人数および担当者

教員：５名　学生25名

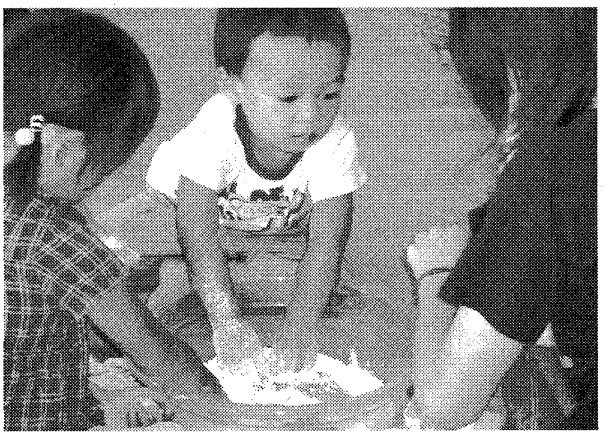
（幼教ゼミ学生だけでは少ないため，今回は特別に小麦粉を扱うということで，食栄の学生12名が参加した。）

担当内訳／受付・案内・託児・遊びの支援

内　　容

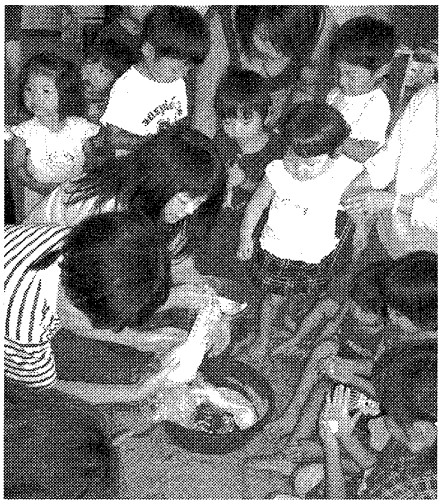
＜小麦粉粘土遊び＞

子どもたちがのびのびと遊び，汚しても良いように部屋いっぱいにビニールシートを敷いた。



保護者は懇話会に出席のため，別の部屋へ移動。親から離れられない子どもは，一緒について行ったが，あとの子たちは学生と一緒に部屋に残った（父親２名と母親１名も残った）。

一人の学生が３～４名の子どもを担当。まずは，食紅の入った小麦粉をボールに入れ，子どもたちに自由にさわらせた。日頃，小麦粉にさわることがないし，また，同じような触感のものが遊ぶものにはない子どもたちなので，大喜びで，そのさらさら感や，すべすべ感を楽しんでいた。



学生もその触感にふれ，子どもと同じように楽しんでいた。ひとしきり小麦粉と遊んだあと，これに水を加え，粘土にした。水を入れた段階で，食紅で色が変わったり，べとべとになったりすることに驚いたが，喜んで取り組んでいた。粘土の状態になるまで，学生たちも子どもたちもワイワイ言いながら楽しんでいた。

粘土になると，長く伸ばしたりちぎったり丸めたりして，どの子どもも感触を喜んでいた。特に，父親の一人がとても子どもと楽しそうに取り組んでいたのが印象的だった。

親から離れられない子どもたちも，その場に粘土を持ち込んで楽しく遊んでいた。

学生たちは子どもと接している母親の姿や，実習では見られない母親たちの相談している様子を見て，親子の思いを感じた様子だった。

＜子育てに関する懇話会＞

前回と同様に行われた。プログラム№②「子育てに関する懇話会」の項目を参照して下さい。

総括反省および考察

食栄の学生が参加したことは，幼児教育として食育が話題になってきている今，連携をはかるよいきっかけになった。食栄の学生が主であったため，説明や歌，話などは教員が行った。学生にさせたいことである。今回は懇話会があったので，子どもだけで小麦粉粘土を楽しんだが，家庭でも気軽にできる素材なので，次回は是非，保護者も一緒に楽しめるようにしたい。

プログラムNo⑥

活 動 名

「うたっておどってレッツゴー・みーちゃんのおはなし」

実 施 日

平成17年10月22日（土）

10：00 am ～12：00 pm

1 ：30 pm ～3 ：15 pm

担 当 者　篠田美里　三羽佐和子

手伝った人数

教員　午前の部4名　午後の部4名

学生　午前・午後　篠田・三羽ゼミ生37名

参加人数

午前の部　19組（親20名・子27名）

午後の部　24組（親32名・子41名）

見学者　3名

ね ら い

・手遊びや歌、親子でのリズム遊び、踊りを通して表現する楽しさを体験する。

・壁面に隠れている音のでるおもちゃを見つけ、楽しむ

・みーちゃん人形からのおはなしに耳を傾け、お話しからイメージをふくらませる体験をする。

内　　容

・手遊び「おいでおいで」にて、お返事ごっこをする。

・歌「かくれんぼ」紙芝居と共に歌う

・歌と踊り「たまご」「なべなべ」

・踊り「あんぱんまんまーち」

・音探検遊び「室内に仕掛けられ音をみつけ、楽しむ」

・みーちゃんのお話し「たのしかったね」

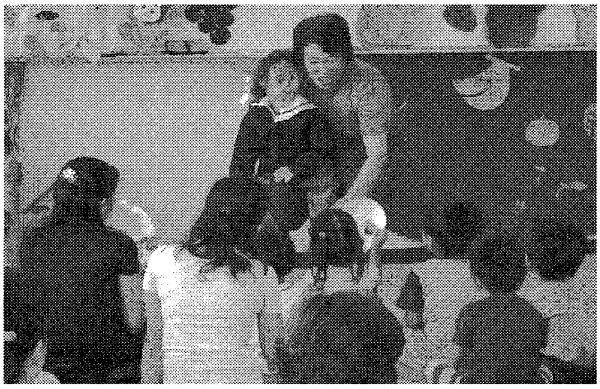
記録と考察

後期プログラムの申し込みが139組（ほとんどが全5回日程希望）と前期の倍であったため、今回から、午前の部と午後の部の2回開催とした。

学生の緊張持続による疲労を心配したが、どちらも意欲的に参加できた。一年生は会の全体像が掴めなかったにもかかわらず、それぞれの担当場所で臨機応変に対応できたことが大きな学びになった。二年生は、企画、準備、実行のすべてに意欲的であり、創意工夫をこらしながら関わった。参加する子どもの年齢が2～3歳児が多いと分かった時点で、より親子でふれあいながら参加できるプログラムを考えた。低年齢児向けの内容を検討し、振り付けを工夫した。そして、親子で踊れる場面を増やした。このことが、午前の部も午後の部も好評に繋がったと感じた。

参加人数は、後期プログラムのスタートであったので、お休みが少く、午後の部は、人数が多すぎた。参加者総数が70人を越えると活動がしづらいと感じた。今後の課題である。

みーちゃん人形を使っての腹話術のお話しは、子ども達の心を惹きつけ、大好評であった。映像に慣らされている子どもたちにとってお話しを聞き、イメージをふくらます機会は貴重な体験である。この様な、家庭では味わうことが出来ない遊びを提供し、参加した子どもが体験することは、とても重要なことであり、「あそびの森」のコンセプトの一つでもある。これからも、「あそびの森」のコンセプトに添った内容を検討していきたい。



みーちゃんのおはなし

プログラムNo.⑦

活 動 名

「できるかな？ はいるかな？ あたるかな？」

実 施 日

平成17年10月29日（土）

10：00 am ～12：00 pm

1 ：30 pm ～ 3 ：15 pm

担当者　伊藤功子

参加人数

午前の部　21組　（親27名、子38名）

多治見市母子保健推進員32名

午後の部　24組　（親29名、子35名）

担当学生・教員数

学生午前　23名、午後15名、教員5名

ね ら い

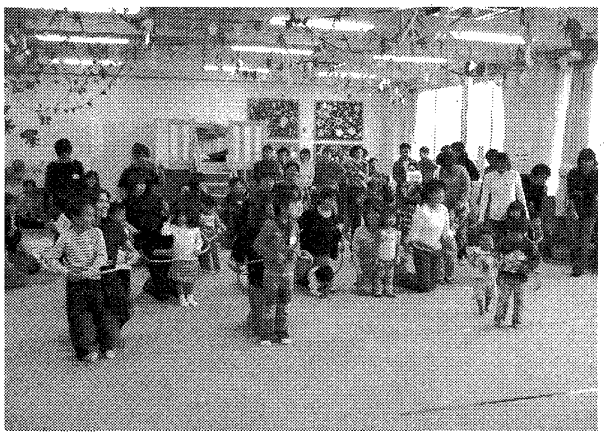
子どもは、運動神経が発達する時期に、運動神経を使った運動がしたくなるのは、周知の通りである。今回は、投能力の基本になるあそびとして、お手玉を使い投げ入れる、投げ当てるができるまで挑戦して達成感を得られることで、気持ちが落ち着き、情緒の安定をはかることとした。

内　　容

1．ディズニー体操
2．手あそび
3．親子でできるかな？
4．じゃんけんあそび（フラフープの中に親子で入る。スタートラインに立って、じゃんけんに勝ったら次のラインへ進む。最初にゴールするのは誰かな）
5．はいるかな？（お手玉を逃げる籠の中に投げ入れる）
6．あたるかな？（大きなダンボールの箱に動物の顔が書いてある、その動物の目や口，耳に当てる）

考　　察

神経系の発達が著しい2歳からのこの時期に身につけたい行動を正確に行う力(調整力)として、投げることを中心に行った。年齢の差があったが、年齢の高い子の姿を見て年齢の低い子が上手投げ、下手投げ，その他の投げ方を真似してボールでなくお手玉であるが投げ当てることができたことは良かった。親子体操は、家庭で手軽にできるものを紹介した。いまごろ毎日子どもとスキンシップをとっていることでしょう。動き回る、走り回る子どもがたくさんいたことは満足感も得られ、ねらいでもある情緒の安定が図られたと思われる。学生にとって、授業や実習では学べない良い機会であった。



プログラムNo. ⑧

実施日　平成17年12月10日（土）
10：00 am～12：00 pm
1：30 am～3：15 pm

活動名　クリスマス会

ねらい

「クリスマス」という行事を親子で楽しむ。また、ともだちと一つの行事を楽しむことのうれしさや楽しさを味わう。

＜主催者側＞行事を身近に感じ、楽しむことを味わってもらうため、個々の年齢にあった活動とどの年齢の子どもたちも一緒に楽しめる活動を企画し、進行にあたっては全員が安全に楽しめるよう配慮する。

担当者　杉山ゼミ
（指導教員：杉山喜美恵）

参加人数　午前の部：50名
参加家族19組
（保護者：20名／子ども：30名）
午後の部：42名
参加家族16組
（保護者：18名／子ども：24名）

手伝った人数および担当
教員：4名　学生：28名

担当内訳　教員：学生補助
学生：受付、司会進行、託児、駐車場整理

内　容

1．オープニング（歌とおどり「あわてんぼうのサンタクロース」）
2．絵本をみよう（『クリスマスおめでとう』ひぐち　みちこ作／こぐま社）
3．オーナメントをつくろう（年齢別活動）
　5・6歳児：くるくるプレゼント
　4歳児：パラシュートサンタ
　3歳児：ストローサンタ
　2歳児：ポケットツリー
　0・1歳児：てがたサンタ
4．歌って踊ろう（「あわてんぼうのサンタクロース」）
　プレゼント：クリスマスカード（若杉ゼミ制作）

総　括

年齢幅が大きく、全員が楽しむということに問題があったという前年度の反省をふまえ、今年度は年齢別の活動をとりいれた。

また、当日楽しむだけでなく、クリスマスにむかって、家でも楽しめるヒントになる活動という視点で企画した。

参加者のアンケートの結果、作ったオーナメントを持って帰ることができたこともあって、おおむね楽しんでいただけたようである。また、後のアンケートには今回、おこなった活動を再度、家でもおこなって楽しかったという記述もあり、今回のプログラムへの参加が日々の生活の中で生かされたことは大変うれしいことである。

しかし、中には学生の態度に対する厳しい指摘や、材料に牛乳パックを使用したことに対して、アレルギーのある子への配慮がなされていないという指摘もあった。

リハーサルの時間をきちんと確保するなど当日までの授業のあり方、材料への配慮などひとつの会を企画運営することに対してもっとしっかり取り組まねばならないと感じた。

クリスマス会の様子

プログラム№⑨

活 動 名　「つくって鳴らそう」

実 施 日　平成18年1月28日

10：00 am ～12：00 pm

1 ：30 am ～ 3 ：15 pm

ね ら い

身近な物から音を感じ取ったり、発見したり、さらには音を創り出したりする感覚を育められればとの目標を立て、その手法として、絵本に音入れをしたり、参加者たちと一緒に楽器作りなどを経験学習することとした。

担 当 者　窪田　千恵子

参加人数

午前の部　16組（子ども19名　保護者20名）

午後の部　17組（子ども29名　保護者23名）

活動学生

午前　10名　2年　　午後　8名　2年

手伝い学生

午前7名　午後7名　　教員3名

内　　容

午前の部

①　魔法の帽子

プラスチックコップにカラービーズを入れた「マラカス」を製作した。

②　ふしぎな玉子

筒の長さ、太さで音程の違いが分かるホーンパイプを使った。

午後の部

①　さるかに合戦

新聞紙を使った紙てっぽうを作った。

②　ブレーメンの音楽隊

「マラカス作り」も楽しんだ。

考　　察

※　今回の活動は、午前と午後の2回行うことでもあり、又、昨年の経験から、1グループで作品を製作させるよりも、各グループを小分けしたほうが、それぞれの責任分担が理解し易く、且つ又、各自の意見も取り入れ易いこと。更には、他グループと違った内容を考え出させるという効果的な面も考慮し、午前、午後、各小分けしたグループ毎に、活動作品製作に当たらせた。

※　グループを小分けした結果。意見がまとまり易くなったこと。さらには、競争意識も手伝い、各グループそれぞれに、幼児音楽、アニメ曲など、無意識に口ずさんでいた曲を、絵、エプロンシアター風、ペープサートなどにうまく取り入れられたと思う。その結果。学生たちによる研究の一環としては、さまざまな側面の応用力を引き出せたと感じている。

※　苦慮した点については、空き缶とゴム風船利用による太鼓の音の出し方が、意外に難しかったこと。更に、ホーンパイプによる保護者のみの即興演奏も考えていたが、実際には、幼児から保護者を離した行動は難しいと判断し、着座のまま、自由に使用させるのみとしたこと。その代わりに、学生たちを音階順に並ばせ、即興で簡単な童謡を打たせた。即興だったこともあり、学生たちの失敗が却って笑いを誘い、会場をなごやかな雰囲気にさせるという、思わぬ効果を上げた。

※　マラカスについては、カラフルなビーズなどを使っていたため、幼児の探求的好奇心をかき立て、その結果。マラカスの破壊を招いたことなど。今後の作品作りの参考にしたい。

※　「紙てっぽう」は、子ども、大人共一生懸命に鳴らし合い、活気が出た。

※　手伝いの一年生の意見として、見学者の立場だったことでもあり、子育て支援プログラム「あそびの森」を客観的に観ることが出来、今後，自分たちが行うにあたっての工夫、構想などを想定し、参加意欲を掻き立てられたようである。

プログラムNo.⑩

活動名　「クッキーの粘土あそび」

実施日

平成17年2月18日（土）集団給食室

10：00 am～12：00 pm

1：30 am～3：15 pm

ねらい

親子で楽しい手作りおやつ作りを体験する。

クッキーの生地で造形遊びをし、子どもや親の想像力を刺激する。

食べ物を大切にする気持ちを養い、食に対する意識を高める。

参加人数　103名　参加家族37組

（保護者43名/子ども60人）

※参加人数は午前・午後のトータル

手伝った人数および担当者

教員：13名（幼教6名/食栄7名）　学生：25名（幼教25名/食栄2名）

担当内訳/案内・受付・託児・遊びの支援

内　容

平成17年度最終回のプログラムは、「あそびの森」初めての試みとして、食物栄養学科の協力を得、集団給食室を活動の場として実施した。

プログラム内容は、親子で一緒に楽しむ手作りおやつ作りです。

一つのテーブルに一～二組の家族がつき、クッキーの生地作り（白・茶・緑の三色）から始め、形作り、わくわくする焼き上がり、試食までをフルコースで楽しんだ。形作りでは、生地を粘土に見立て色々な自分だけのオリジナルクッキーをたくさん作った。アンパンマンやバイキンマン・車・お父さんの顔・豚や犬・なにやら得体の知れないびっくりするような大きな形、などなど、参加した子どもの想像力の豊かさには驚くばかりであった。お子さんに負けずお父さんやお母さんも張り切って、オリジナルクッキー作りに没頭された。

形が完成した大量のクッキーの焼き上げは、食物栄養学科の教員7名がフル回転で担当した。焼き上がるまでの待ち時間は15分～20分ほどあったが、オリジナルクッキーへの期待感からか、我慢強く待つ子供たちの健気な姿に感心した。

図-1 生地作り

図-2 オリジナルクッキーの出来上がり

最後は、出来上がったクッキーに舌鼓し、大切に包まれたお土産を手に、皆さん笑顔で家路につかれた。

今回学生は、各テーブルに一人ないし二人つき、クッキー作りの援助を行った。

総括・反省および考察

おやつ作りの活動は、初めての試みなので、材料用具の準備・学生の支援・クッキー作りの方法などかなり綿密に計画し実行した。細かな点も含めれば少々神経を使いすぎたのではないかと考えている。勿論、食物を扱うので万全の安全性と準備を整えておくことは必要不可欠である。しかし、参加した親と子が活動の過程で失敗も含め自ら考え工夫する余地を残しておくことも、大切なのではないかと今回感じた。

実際、参加した家族は、浮かび上がった問題に臨機応変に対応する逞しい姿が随所に見受けられた。また、問題を親子で解決したと

きの笑顔と喜びの声が強く印象に残った。何事も自らが試行錯誤し解決を導くことは、喜びも深く本当の意味で物を知るということに繋がる。

活動の支援に関しては、2年生が1年半のゼミの集大成として取り組んだこともあり、親子とのコミュニケーションについては大きく進歩していた。しかし、クッキー作りの技術的援助については、自信がないのか消極的な面が少し目に付いた。このことは、日ごろ料理に関わる機会が少ない学生が多いことを物語っているのではないかと考える。

プログラムNo.⑪

活動名　「幼稚園交流会」

実施日　平成18年　2月10日（土）
10：00 am 2：00 pm・保育実習室

ねらい

同年齢の子どもの活気ある活動・交流を促す。小学校入学に向けて人間関係の広がりを培う。

担当者　若杉・篠田・三羽

参加人数　37名　（保育者5名/園児32）

手伝った人数および担当者

教員：3名学生：4名

概要・内容

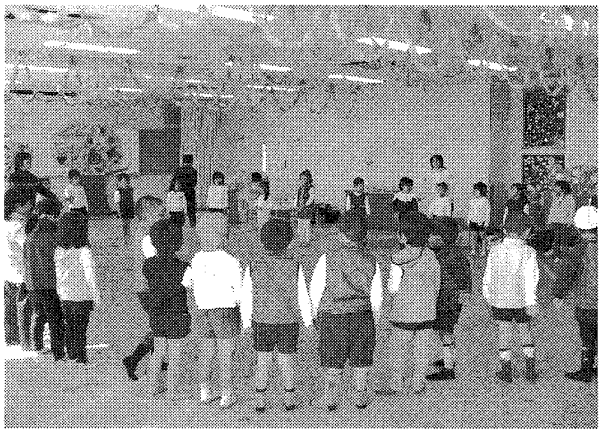
「幼稚園交流会」は、岐阜市立東幼稚園と大洞幼稚園がともに単一学級のため、同年齢の子どもの活気ある活動・交流を促すため年五回、お互いが持つ施設の有効利用も兼ねて両園で交互に実施されている。両園児交流の最後の場として「あそびの森」が活用されるのは、昨年に続き二度目となる。交流の締めくくりとして利用される理由は、本学が両園の中間地点に位置し、交通の便が良く、遊びの空間として施設が充実し、さらに大学側からも遊びのプログラムを提供できることにある。

交流の内容は、幼稚園が企画したリズム遊びと歌の交流を主とし、その活動の合間に自由参加で、大学側が交流会の記念に残る活動として墨絵の製作コーナーを用意した。製作コーナーは参加を義務付けなかったにもかかわらず、全園児が墨絵を描いた。最後は、みんなでお弁当を食べ、友達の輪を広げ交流会を終えた。

考　察

「幼稚園交流会」は、本来の「あそびの森」のコンセプトとは異なる。しかし、短期大学の地域貢献・次世代育成支援という観点からは同議である。また、今後の「あそびの森」の展望についても、更なる広がりや可能性があることを交流会を実施したことによって実感している。今回が昨年に続いて2回目だが、今後も希望があれば続けていきたい。

墨絵の制作活動



歌の交流

総　括

「あそびの森」も２年目、３タームを終え、徐々に軌道に乗ってきた。平成17年度の特色として３点挙げられる。

まず、新たに企画された「子育てに関する懇話会」である。とても好評であった。少人数で、年齢別のグループ編成、ファシリテーターとして臨床心理士の配置、親子は別々でも、いっしょでもどうぞ（お子さまの気持ちにそって)･･･、これらが、好評の要因となった。

次に、参加申し込み者の増加が挙げられる。６月12日、子育て支援事業として新聞に取り上げられたことで広域に知れ渡り、後期プログラムの申し込みは前期プログラムの約、２倍の申し込みがあった。その応募に対応すべく対策として、午前の部と午後の部の２回、開催をすることとした。学生の緊張が続くだろうか？急な午後の部の開催に対して、受け入れて頂けるだろうか？欠席者が多く出るのでは？など危惧したが、順調に進めることが出来た。また、午後の部では、欠席も少なく、また、父親の参加が多かった。ファミリーで参加しやすい時間帯といえる。午後の部の効果を感じた。

３点目として、３月に、岐阜県産業文化振興事業団地域文化研究所の環境調査研究「子どもの遊びのイベント化の可能性についての調査研究」【※１】の一つに「あそびの森」が選ばれたことが挙げられる。そのことにより、「あそびの森」を詳しく検討する機会に恵まれた。これらの調査結果を生かしながら平成18年度の「あそびの森」を進めているところである。

今後の問題点としては、参加者の願いである申し込みプログラム全てに参加できる方法を検討することである。「あそびの森」を通して子育てグループが出来、それぞれのグループが育ち、独立し、地域の子育てグループの核となることも「あそびの森」の願いである。そのためにも、もう少し多く開催する方法を考えたい。

それぞれのゼミが１～２回参加する「あそびの森」は、学生の育ちに深く関わっている。どのゼミも企画の段階から学生が主体となっている。このことが学生の主体性を育て、見通しを持って能動的に進める意欲につながっている。さらに、自分自身が能動的にかかわっていることから、自分達で問題点をみいだし、話し合って解決していく姿となっている。

「あそびの森」では、目の前の子どもに頼られることで、どの学生も「お姉さんに」変身する。まさに「子育て、親育ち、学生の心の育成」の場となっている。

これらの「あそびの森」のコンセプトを次年度に繋ぎたい。

【※1】「子どもの遊びのイベント化の可能性についての調査研究報告書－ P81 ～ P100 －(岐阜県産業文化振興事業団地域文化研究所)

―児童教育学科　　幼児教育専攻―

2005年度　「あそびの森」プログラム

場所：東海女子短期大学７号館５階　　保育実習室あそびの森

＜前期プログラム＞　時間 AM10 時～ 12

No	開催日	あそび	どんなあそび
1	5月 28 日	新聞で遊ぶ	新聞紙を破ったりちぎったりして、気持ちを思いっきり発散しよう。破ったりちぎったりした紙切れから色々な形を連想ゲームし、造形遊びも楽しみます。
2	6月 25 日	㊔子育てに関する懇話会 ㊑お話の世界で遊ぼう	少人数のグループになって、お父さんお母さんたちで子育てについてお話しましょう。ファシリテーターとして各グループに臨床心理士が入ります。 お子さんは、学生と一緒に絵本や紙芝居を楽しみます。
3	7月９日	英語で遊ぼう ピンポンパン 世界の遊び	英語の音や文字に親しめるように、英語を使ってゲームをしたり、歌を歌ったりします。初めて英語に親しむお子様、歓迎いたします。 アメリカのお友だちやベトナムのお友だちはどんな遊びを楽しんでいるのかな？それを真似っこしましょう。
4	8月 27 日	親子で作る ペーパークラフト	インターネットから取り出した紙のおもちゃを、親子で一緒に作って遊びます。 はさみとのりを持ってきてね。
5	9月 17 日	㊔子育てに関する懇話会 ㊑小麦粉粘土遊び	少人数のグループになって、お父さんお母さんたちで子育てについてお話しましょう。ファシリテーターとして各グループに臨床心理士が入ります。 お子さんは、小麦粉粘土のさらさら、べとべと、すべすべ感を身体で感じて楽しみます。 丸めたり、延ばしたり、ちぎったりなどしながら好きなものを作ったり、壊したりして楽しみます。

＜後期プログラム＞　時間　AM10 時～ 12 時　団体鑑賞については相談に応じます。

6	10月 22 日	うたっておどってレッツゴー みーちゃんのおはなし	リズム遊び（リトミック）をしますよ！何に変身しようかな？動きやすい服装でいらして下さい。 歌って踊ったあとは、人形のみーちゃんが楽しいお話をしてくれますよ。
7	10月 29 日	できるかな？ はいるかな？ あたるかな？	神経系の発達が著しい２歳から６歳の時期に身につけたい「行動を正確に行う力（調整力）」をつけられるような遊びをします。
	11月４日（金曜日）	ペープサート劇を観る会	幼稚園、保育所団体別鑑賞会（団体のみ）
	12月２日（金曜日）	ペープサート劇を観る会	幼稚園、保育所団体別鑑賞会（団体のみ）
8	12月 10 日	クリスマス会	歌、ゲーム、お話などおねえさんと一緒に一足早いクリスマスを楽しんでみませんか。
9	1月 28 日	つくって鳴らそう	身近な材料で音発見や工夫をして、お話といっしょにならしてみようね。
10	2月 18 日	粘土遊びのクッキー作り	クッキーの生地を粘土に見たてて、色々な形を作ってお菓子作りを楽しみます。どこにも売っていない自分だけのオリジナルクッキーが出来るよ。材料費として１家族 100 円必要です。

平成17年度「あそびの森」参加者数

回		組	子ども	大人計	母　親	父　親	その他	備　考
1	5月28日	27	39	36	27	9		
2	6月25日	22	35	22	22			
3	7月9日	24	38	25	22	3		
4	8月27日	18	32	18	18			
5	9月17日	20	32	22	20	2		
	前期合計	111	176	123	109	14		
6	10月22日	43	68	52	43	9		
	A	19	27	20	19	1		
	B	24	41	32	24	8		
7	10月29日	45	73	89	45	11	33	
	A	21	38	59	21	6	32	家庭学級講座メンバー
	B	24	35	30	24	5	1	
8	12月10日	35	54	38	35	3		
	A	19	30	20	19	1		
	B	16	24	18	16	2		
9	1月28日	33	48	43	33	10		
	A	16	19	20	16	4		
	B	17	29	23	17	6		
10	2月18日	37	60	43	37	6		
	A	17	25	20	17	3		
	B	20	35	23	20	3		
	後期合計	193	303	265	193	39	33	
	合　計	304	479	388	302	53	33	
	2月10日		子ども	保育者				
	幼稚園遊びの交流		32	5				
	総合計	304	511	393	302	53	33	
	参加人数総合計		906					